

入楞伽經の原典研究

— 梵文「現証品」「如来常無常品」「刹那品」「變化品」和訳・梵文訂正 —

安 井 広 濟

さきに筆者は、大谷学報第四十三巻第二号に入楞伽經の「食肉品」の梵文和訳を発表し、また、大谷大学研究年報第二十集に「無常品」の梵文和訳を発表した。ここに発表

する必要の認められる經典である。あえて、和訳の発表を つづいて編輯氏にお願いした次第である。

梵 文 和 訳

する「現証品」「如来常無常品」「刹那品」「變化品」は、「無常品」と「食肉品」との間に存する諸品であって、以上によって、入楞伽經のほぼその和訳をおわること

現 証 品

になる。入楞伽經は大乗仏教々義の研究にとって重要な資料であり、故鈴木大拙博士の英訳、故泉法環教授の和訳、

地 (bhūmi) の次第について

光寿会よりだされた和訳があるのであるが、すでに識者によく、梵文の解説のきわめて難渋な經典であって、チベット訳や、チベット訳に伝わる智吉祥賢 (Jñānasrībhadrā) の註釈によって研究される今日から見れば、改めて和訳しな

^{p.211} そのとき、実に、マハーマティ菩薩摩訶薩は、さらにもた、世尊に、次のようにいった。「世尊よ、一切の菩薩と声聞と独覺の滅尽〔定に入る〕次第相続の相についての知識を、わたくしに示してください。その次第相続の相を熟知することによって、わたくしと他のもろもろの菩薩摩訶薩は安樂なる滅尽定にまどうことなく、声聞と独覺と外道

の惑乱におちいらぬでありましょう。」と。

世尊はのたまうた。「されば、マハーマティよ、汝はよく聞き、よく思念せよ。わたくしは汝のために説くであろう。」と。「よきかな、世尊よ」と、マハーマティ菩薩摩訶薩は世尊に聽從した。

世尊は、かれに次のようにのたまうた。

マハーマティよ、第六地を得おわつて、もろもろの菩薩摩訶薩と一切の声聞と独覚とは、滅尽〔定〕に入る。しかも、第七地において、さらに念々に、もろもろの菩薩摩訶薩は、一切の存在の自性の相を放棄して入定する (samāpadyante)。しかし、声聞と独覚とは、そうでない。なぜなら、かれら声聞と独覚の滅尽定は、作為することのある所取・能取の相におちいつているからである。故に、かれらは第七地において念々に「一切の存在の自性の相を放棄して」入定しない。かれらは、一切法の無差別の相をえず、種々相の無をうることなく、一切法の善と不善の自相を了解せずに入定する。故に、「かれら声聞と独覚とは」、第七地において念々に入定するような熟達した入定がない。

マハーマティよ、第八地において、菩薩摩訶薩と声聞と独覚とは、心と意と意識の分別憶想の滅がある。「しか

し、菩薩摩訶薩は」、初地と第六地とにおいて、三界を心

・意・意識のみと觀察する。すなわち、「三界を」、我我所をはなれ、自心の分別より生じたものであり、種々の相の外界物となったものでない、「と觀察する」。しかし、もろもろの愚人の自心は、所取・能取の相をもつて二種に転変し、無始時來の垢重き分別と戲論の習氣に熏ぜられた「かれらの」自心の無知は、「これらを」了解しない。マハーマティよ、「また」、第八〔地〕において、声聞と独覚と菩薩とに、涅槃がある。しかし、もろもろの菩薩は、禪定の仏として、般涅槃しない禪定の安樂によつてたもたれる。もし、たもたれないならば、如來地として不完全であるから、衆生〔利益の〕事業の相續が断ずるのである。また、如來の種姓 (kulavāṃsa) が断ずるのである。また、諸仏世尊は不可思議なる仏の大我の性 (mahātmya) を説きたもう。故に、^{p.213}「もろもろの菩薩は」般涅槃しない。しかし、声聞と独覚は、禪定の安樂によつて心が奪われる。故に、かれらには、このばあい、涅槃の覺相がある。

マハーマティよ、七つの地において、心・意・意識の相を熟知し熟達すること、我我所の執着である法と人との無我であること、流転 (pravṛiti) と還滅 (nivṛiti) および自共相を熟知すること、四無礙弁の決択に熟達すること

と、自在力を享受し楽しむこと、地の次第にはいること、
 「三十七」菩提分法〔などの〕、詳細の分別(vibhāga)が
 わたくしによってなされる。「これは」、もろもろの菩薩
 摩訶薩が、自と共の相を了解せず、地の次第相続に熟達し
 ないことよって、外道の悪見の道におちいらぬよう
 に、考へてのことである。故に、地の次第の設定がなされ
 るのであるが、マハーマテイよ、そこに、何ものも生ぜ
 ず、また、滅しない。地の次第相続と三界の種々の表現
 (upacāra)とは、これは、唯自心所現にすぎないもので
 ある。もろもろの愚人は、「自と共の相を」了解しない。
 「また、地の次第相続に熟達しない」。故に、もろもろの
 愚人が了解せず「熟達し」ないから、地の次第相続の説示
 と、三界の種々の表現とが、わたくしともろもろの仏とに
 よって立てられる。

また、マハーマテイよ、もろもろの声聞と独覺は、第八
 菩薩地において、滅尽定の安樂の美酒に酔い、唯自心所現
 を熟知せず、自共相を障碍する習氣と人法の無我にたいす
 る執着の見解におちいるから、分別の涅槃の心(mati-bu
 dhi)をもつものであり、寂滅の法の心をもつものではな
 い。しかし、マハーマテイよ、もろもろの菩薩〔摩訶薩〕
 は、滅尽定の安樂を経験しおわり、「衆生にたいする」宿

願と憐愍と慈悲とをそなえ、「十」無尽句の區別を知って
 般涅槃しない。かれらは分別の不生起をもって般涅槃し、
 かれらの所取・能取の分別は滅せられる。一切法の唯自心
 所現を了解するから、「かれらに」分別は起らない。「し
 かし」、心・意・意識と外界の存在の自体と形相にたいす
 る執着をはなれても、「かれらに」、仏法のためというこ
 と(buddha-dharma-hetu)が生起しないのではない。「か
 れらに」、智(jñāna)にもなわれ、如来の自内証の地を
 証得するから、「かれらには」、夢中に人が河を渡る「喩え
 の」ように、「仏法のためということが」生起する。たと
 えば、マハーマテイよ、或る眠っている人が、夢中に大い
 なる努力と熱望とをもって大河をみづから渡るとき、かれ
 が、いまだ渡りおえずして、目覚めるとしよう。かれは、
 目覚めおわって、次のように考へるのであらう。「これは真
 実であるか、もしくは、虚妄であるか」と。「また」、か
 れは、次のように觀察するであらう。「これは真実にあら
 ず、虚妄にあらず。ただ、「これは」、見聞覚知した過去
 の経験の分別の習氣の種々の色と形相にすぎないものであ
 り、無始時來の分別よりおこったものである。「実には」、
 有無の見解の分別をはなれたものであり、意識による過去
 の経験が夢中に現するのである」と。これと同様に、実

に、マハーマティよ、もろもろの菩薩摩訶薩は第八菩薩地において分別が不生起であることを見おわって、——「すなわち」、初地より第七地にすすみゆき、一切法を現觀し、幻などの法と相似ることによって、一切法にたいする願望や所取・能取の分別とはなれた心所の分別のうごきを見おわって、——仏の教法を語る。これがマハーマティよ、もろもろの菩薩の涅槃であり、「これは」、未証のものを証せしめるための実践 (prayoga) であって、滅無 (vinaśa) ではない。「これは」心・意・意識の分別憶想をはなれることによって、無生法忍をうるのである。しかも、マハーマティよ、無相の分別によって寂滅の法が説かれるのであるから、勝義においては、「地」の次第がなく、次第の相続がない。ここに、次のように説く。

(1) 唯心 (cittamātra) と無相 (nirābhāsa) と住 (vīṭara) と仏地 (buddha-bhūmi) とは、これらは、実に、すでに「過去に」諸仏によって説かれ、また、「現在」説かれ、「未来にも」説かれるであろう。

(2) 実に、諸七地は「唯」心 (citta) である。しかし、いまや、第八「地」は無相である。実に、この二つの地は住であり、余の地 (九・十地) は、我れを自体とするものである。

(3) 自内証と清淨である、この地は、我れを自体とするものである。大自在天は最勝の住所であり、色究竟天は莊嚴する。

(4) 実に、火の光の如く、種々の美しい清涼な、かれ (色究竟天) の光が、三有を変現する。

(5) あるいは、「現に」三有を変現し、あるいは、すでにさきに、「三有を」変現し、そこにおいて、わたくしは、もろもろの乘 (yāna) を説く。これは、我れを自体とする地である。

(6) しかし、第十「地」は初「地」であり、初「地」は第八「地」であり、また、第九「地」は第七「地」であり、第七「地」は第八「地」である。

(7) 第二「地」は第三「地」であり、第四「地」は第五「地」であり、第三「地」は第六「地」であって、無相においては、いかにして、次第があるうか。

以上、現証品第四

如来常無常品

如来の常・無常について

^{P.217} そのとき、実に、マハーマティ菩薩摩訶薩は、さらさまた、世尊に、次のようにいった。「世尊よ、如来応供正等

覚者は常住 (nitya) ですか、それとも、無常 (anitya) ですか。」と。

世尊はのたもうた。

マハーマティよ、如来は常住でもなく、無常でもない。

これは、何故かといえ、すなわち、ともに過失におちいるからである。実に、マハーマティよ、ともに過失におちいるであろうというのは、「この中、もしも」、「如来が」常住であるならば、「如来は」、「外道の」因 (Kāraṇa) の過失におちいるからである。マハーマティよ、一切の外道のものもろの因は、非所作 (akriyaka) のものであり常住 (nitya) なるものである。だから、「外道の因が」非所作の常住なるものであるかぎり、如来は常住なるものではない。「この中、もしも」、「如来が」無常であるならば、「如来は」所作のものにおちいるであろう。「如来は」蘊と所相・能相がなく「同相であるから」、蘊が減することによって断滅するであろう。しかし、如来は「蘊とともに」断滅するものではない。マハーマティよ、実に、一切の所作は無常である。瓶と布と草と木と練瓦などの一切は「所作であり」無常である。「だから、もしも、如来が無常であるならば」、所作性であるから、「如来の」一切の智慧の資糧 (sambhāra) は無意義になろう。また、一切の所

作は如来になろう。区別の理由がないからである。故に、以上の理由によって、マハーマティよ、如来は常住でもなく無常でもない。

また、マハーマティよ、如来は常住ではない。なぜなら、「虚空を常住とすると」、虚空の「資糧が無意義におちいる」如く、「如来を常住とすると」、「如来の」資糧が無意義におちいるからである。マハーマティよ、たとえば虚空は常住でもなく無常でもない。常住と無常とはなれたものであるから、同一性^{P.218}と別異性・俱性と非俱性・常住と無常との過失によって語られるべきものではない。また、マハーマティよ、「如来が常住であるならば」、生ずることのない常住性 (anutpadānityatva) によって、「如来は」、兎・馬・驢馬・駱駝・蛇・蠅・魚の角とひとしくなるであろう。故に、生ずることのない常住性におちいるから、如来は常住ではない。

しかし、また、マハーマティよ、如来が常住である法門がある。何故かといえ、ば、「如来の」現觀の証得の智 (abhisamaya-adhigamajñāna) が常住であるから、如来は常住である。実に、マハーマティよ、もろもろの如来応供平等覚者の現觀の智は、常住である。もろもろの如来が世に出ずるも出でざるも、この法性 (dharma) と法の

決定性 (dharma-niyamata) と法の存在性 (dharma-sthitā) とは、一切の声聞と独覺と外道の現觀の中に住している。虚空の中に法の存在性があるのではない。しかし、もろもろの愚かな人々は、「これを」知らない。マハーマティよ、もろもろの如来の現觀の智は、般若 (prajñā) と智 (jñāna) とによって、あらわしだされる。マハーマティよ、もろもろの如来応供正等覺者は、心・意・意識、蘊、処、界、無明の熏習によって、あらわしだされない。マハーマティよ、一切の三有は虚妄分別よりあらわれるものである。しかし、もろもろの如来は虚妄分別よりあらわれるものではない。

マハーマティよ、二(所取・能取)があるとき、常住と無常がある。しかし、無二 (advaya) のばあいには、そうでない。実に、マハーマティよ、一切法が無二・不生の相のばあいには、二が遠離される。故に、この理由によって、マハーマティよ、もろもろの如来応供正等覺者は、常住でもなく、無常でもない。マハーマティよ、言葉の分別が生起するかぎり、常住と無常の過失におちいる。^{p. 219} マハーマティよ、もろもろの愚人の常住と無常の執着は、分別の知覺 (vikalpa-buddhi) が滅尽することによって、しりぞけられる。しかし、寂滅の知覺 (viviṭa-buddhi) が滅尽

することによって、「しりぞけられるのでは」ない。ここに、次のように説く。

(1) 常住と無常とをなされたものとして、また、常住と無常とによってあらわされるものとして、常に諸仏を見る人々は、悪見に支配されない。

(2) 「如来を」常住・無常とするならば、「如来の」証得は無意義におちいる。分別の知覺が欠けることによって、常住と無常とがしりぞけられる。

(3) 立宗 (prajñā) がなされるかぎり、一切は錯乱である。自心のみであることを見るとき、諍論をおこさないであろう。

以上、如来常無常品第五

利那品

(1) 如来蔵の流転と還滅

^{p. 220} そのとき、実に、マハーマティ菩薩摩訶薩は、さらさまた、世尊に「次のように」請うた。「蘊と界と処の生起 (流転 pravṛiti) と止滅 (還滅 nivṛiti) を、世尊よ、わたくしに示してください。善逝よ、わたくしに示してください。アートマン (我) が存在しないとき、なにももの流転と還滅とがあるのですか。もろもろの愚人は、「アート

マンの「流転と還滅とに住し、苦の滅尽〔の意義〕を了解しないから、涅槃を知りません。」と。

世尊はのたまうた。「されば、実に、マハーマティよ、汝はよく聞き、よく思念せよ。わたくしは汝のために説くであろう。」と。「よきかな、世尊よ」と、マハーマティ菩薩摩訶薩は世尊に聽從した。

世尊は、かれに次のようにのたまうた。

マハーマティよ、如来蔵 (tathāgata-garha) は、善と不善の因となり、一切の生 (三世) と趣 (六趣) との作者となり、舞人の如くに危難の趣に生起 (流転) するけれど、我我所をはなれている。「無明と愛と業との」三和合の縁の作用と結びついた「輪廻」が生起するのは、このことを了解しないからである。もろもろの外道は「これを」了解せず、「アトマンという」因 (kāraṇa) の執着に没頭する。

〔如来蔵は〕、無始時來の種々の垢おもき戲論の習気をとどめるから、アーラヤ識 (alayavijñāna) とな¹げられ、無明住地 (avidyāvāsana bhūmi) より生ずる七つの識とともに、大海の波浪の如く、つねに、不断の自体をもって生起 (流転) し、無常の過失をはなれ、²「しかも」、アトマンの学説をはなれ、究極的に本来清淨 (prakṛti-pari-

suddhi) である。これ以外の意と意識などの生滅のある七つの識は、すべて剎那性のものであり、虚妄分別の因より生じた形相と差別とを所縁とし、名と相とに執着し、自心所現の色と相とを知覚し、楽と苦とを経験する (pratisamvedaka) 「主体となる」ものでなく、解脱の因となるものでなく、「ただ」名と相とに「執着する」起煩惱 (pari-utthāna-rāga) が生じたものを能生の因とし所縁とする。ところで、それら「七つの識」の根となげられる執受 (upatā) が滅尽するときに、不生であるから、直ちに「解脱の想 (vimokṣa-buddhi) が生ずる」。自己の思慮分別による楽と苦とを経験せずに、想と受との滅尽定に入定し、四禪と「四」諦と「八」解脱とに熟達していない、もろもろの他のヨーギンにとっても、不生であるから、解脱の想が生ずる。

しかし、「如来蔵となげられるアーラヤ識」が転依しないとき、七転識の滅はない。これは、何故かといえ、七転識は、「それ」を、因とし、また、所縁として生起 (流転) するからであり、しかも、「それ」が、一切の声聞と独覚と外道とのヨーガを修行する人たちの対象にならないからである。みずからの人の無我 (pudgala-nairātmya) 「のみ」を了解し、蘊と界と処の自と共の相を執取す

るから、如来蔵は生起(流転)する。しかし、五法と三性と法無我とを見ることにより、地の次第相続の転依にしたがって、「如来蔵は」止滅(還滅)する。「これは」、他の外道の行道の見解にしたがって観察することはできない。かくして、「如来蔵が」止滅していき、不動地(acalabhūmi)なる菩薩地に住するときに、十の禪定の安楽へはいる道がえられる。しかも、禪定の諸仏によって持せられながら、不可思議なる仏法と、自らの願(svaprañidhāna)とを見ることによって、究極の真実である禪定の安楽よりはなれ、一切の声聞と独覚と外道とに共通しない聖なる自覚智によって了解されるべき、もろもろのヨーガの道によって、十の聖なる種性(gotra)の道と、智(jñāna)と意(manas)とによって成る身と、現行をはなれた禪定とをうる。故に、実に、マハーマティよ、殊勝をのぞむ菩薩摩訶薩によって、「アーラヤ識となづけられる如来蔵」が清浄ならしめられるべきである。

もしも、実に、マハーマティよ、「アーラヤ識となづけられる如来蔵」が、このばあい、存在しないとすれば、マハーマティよ、「アーラヤ識となづけられる如来蔵」が存在しないばあいには、流転もなく還滅もないであろう。しかし、マハーマティよ、もろもろの愚人と聖者とは、流

転があり還滅がある。「故に」、努力を捨てないヨーギンは、「如来蔵の還滅をえて」、聖なる自内証の現法(triśīḍharma)の樂住に住する。マハーマティよ、この如来蔵なるアーラヤ識の行境は、一切の声聞と独覚と外道との究理の見解をもてるものには了解されがたい。本性清浄であるけれども、外来の煩惱によって惑乱される(upakīṣṭa)から、かれらにとって不浄の如くに現する。しかし、もろもろの如来にとっては、そうでない。マハーマティよ、もろもろの如来にとっては、「如来蔵は」、掌中のアーマラカ(amalaka)の如くに、現見の行境である。

マハーマティよ、わたくしは実に、このことを、勝鬘夫人のために教説のなかに説いた。^{P.228} 精細な聡明な清浄な理解力のある余のもろもろの菩薩のために、また、流転生起に執着するもろもろの声聞たちに法無我を教示するために、「とくに」、勝鬘夫人のために、七つの識ともなる「アーラヤ識となづけられる如来蔵」が如来の境(viśaya)であることを説いた。マハーマティよ、如来蔵なるアーラヤ識の境は、声聞と独覚と余の外道の究理の境でなく、実に、如来の境であり、また、汝の如き、精細な聡明な判断と理解による識別力を持ち、意義を追求することある、菩薩摩訶薩の「境」である。声の如くに教説に執着する一切の外

道と声聞と独覺の「境」ではない。故に、実に、マハーマティよ、汝と余の菩薩摩訶薩は、如来藏なるアーラヤ識を完全に知る如来の境にたいして努力すべきである。ただ、「声の如くに」聞くことのみで満足すべきではない。ここに次のように説く。

(1) もろもろの如来の蔵は、実に、七つの識に結びつけられる。執着によって二「所取と能取」が生起し、智によって「二が」減する。

(2) 無始時より熏習された心が、色像の如くに現ずる。如実に観ずるとき、境としての形相は境ではない。

(3) 愚人が指の尖端を執らえて月を見ないように、^{p. 224}かくの如く、文字に計着するものは、我が真実を知らない。

(4) 心は舞人の如くに住し、意は道化師の如し。五(識)とともになる「意」識は、観客の如くに所現を分別する。

(2) 五法(相、名、分別、正智、真如)について

そのとき、実に、マハーマティ菩薩摩訶薩は、世尊に「次のように」請うた。「世尊は五法と「三」性と「八」識と二無我との、それぞれの相を、わたくしに示したもうべし。善逝はわたくしに示したもうべし。」「それら五法と

三性と八識と」二無我との、それぞれの相(「が示されること」)によって、わたくしと余のもろもろの菩薩摩訶薩は、一切の地の次第相続において、これらの法を明らかにすることができるとありましょう。また、これらの法によって、一切の仏法にはいることができ、一切の仏法にはいることから、乃至、如来の自覚地にまでも、はいることができるのでありましょう。」と。

世尊はのたまうた。「されば、実に、マハーマティよ、汝はよく聞き、よく思念せよ。わたくしは汝のために説くであろう。」と。「よきかな、世尊よ」と、マハーマティ菩薩摩訶薩は世尊に聴従した。

「世尊はかれに次のようにのたまうた。マハーマティよ、わたくしは、五法と「三」性と「八」識と二無我との、それぞれの相を汝に説くであろう。すなわち、「五法とは」、名(nāman)と相(rimita)と分別(vikalpa)と正智(samyagjñāna)と真如(tathatā)であり、「これら五法を了解するから」、ヨーガを修行する人たちに、如来の聖なる自覚の境地にはいること、常と断、および、有と無の見解をすてること、^{p. 225}現法樂の三昧の安樂に住することが、現前する。マハーマティよ、五法と「三」性と「八」識と二無我と自心所現の外界の存在の無を了解しないか

ら、もろもろの愚人に分別が生起する。しかし、もろもろの聖者にとっては、そうでない。

マハーマティはいった。「しかし、どのように世尊よ、愚人に分別が生起し、聖者に生起しないのですか。」と。

世尊はのたもうた。

マハーマティよ、もろもろの愚人は、名(nāman)や概念(sañjāna)や表象(sanketa)に執着し、心にしたがう。「心に」したがうから、種々相を言説することによって我我の見解におちいった考え方をもち、多くの色彩に執着する。「多くの色彩に」執着するから、無知におおわれ、色づけられる。色づけられるから、貪欲と瞋恚と愚痴より生ずる業をなす。なしおわって、さらに、繭を作る蚕のように、自己の分別に纏われた心をもつものとなり、諸趣の大海の曠野におちいり、吸水輪(ghaīyānta)の如くに絶えることがない。しかも、「もろもろの愚人は」、愚痴のために、一切法が、幻や陽炎や水中の月の自性の如きものであり、我我所をはなれ、虚妄分別より生じ、所相と能相とをはなれ、滅と生と住のありかたをはなれ、自心所現の分別より生じ、自在天(īsvara)や時(Kāla)や微塵(annu)や最勝(pradhāna)より生じない、ということを知らない。マハーマティよ、もろもろの愚人は、名と相と

に動揺し、相にしたがう。

さらに、マハーマティよ、相とは眼識にたいする顯現となるもの、すなわち、色となづけられるもの、及び同様に、耳、鼻、舌、身、意の識にたいする声、香、味、触、法となづけられるもの、これを相であると、わたくしは語る。さらに、マハーマティよ、分別とは、名を呼称するものであり、へこれはかくの如く、象、馬、車、歩兵、女、男などと名づけられるものであり、別様にあらずと、相を明らかにするもの、これが分別である。さらに、マハーマティよ、正智とは、名と相とを認知しないもの、すなわち、「名と相とが」たがいに外来のもの(āgantuka)であるから、「それらについての」識別がおこらないものであり、不断不常であるから、また、一切の外道と声聞と独覺の地におちいらぬから、正智といわれる。さらにまた、マハーマティよ、その正智によって、菩薩摩訶薩は、名を有とせず相を無としない。「かくの如く」、増益と損減との二辺の悪見をすて、名と相にたいして生起しない。かくの如き智、これを真如であると、わたくしは語る。

かくして、マハーマティよ、真如に住する菩薩摩訶薩は、無相の行境をうるから、歡喜の菩薩地をうる。しかも、かれは、歡喜の菩薩地を得おわって、一切の外道と悪

趣よりはなれ、出世間の法の了解にはいり、究理の見解に専心なることからなれ、種々相を究明し、幻などにひとしい一切法のありかたを明らかにしながら、次第に、聖なる自内証を性質とする法雲地paṇḍitaをうる。法雲「地」の直後に、禅定と力と自在と神通とをそなえた如来地を得る。かれは、「如来地を」得おわって衆生を成熟するために、種々の変化の光明をもつて水中の月の如くに輝きいで、「十」無尽句をよくそなえた性質をもつものとなり、「衆生の」種々の心的傾向を見て、もろもろの衆生に法を説く。マハーマティよ、菩薩摩訶薩は、真如にはいるから、意(manas)と識(vijñapti)とをはなれた身をうる。

さらに、マハーマティはいった。「世尊よ、三性は五法に包摂されるのですか。それとも、自性をもつて成立するのですか。」と。

世尊はのたもうた。

マハーマティよ、実に、かれ(五法)の中に、三性と八識と二無我とは包摂される。まず、名と相とは遍計所執性として知られるべきである。さらに、マハーマティよ、かれ(相)を所依として生起する分別は、心心所となげられるものであり、太陽が光線にとまなわれるように「相」と「同一時に生じ、種々相を自ら分別し了解するものであ

り、これは、マハーマティよ、依他起性といわれる。マハーマティよ、正智と真如とは、滅しないものであるから円成実性として知られるべきである。

さらにまた、マハーマティよ、自心所現のものが執着されるとき、分別が八つ(八識)にわかたれる。相が虚妄の姿に遍計所執されるから、我paṇḍitaと我所との二つの「虚妄の」取着を滅することによって二無我が生ずる。マハーマティよ、五法の中に一切の仏法と地の差別の次第相統と、声聞・独覚・菩薩、および如来が、「それぞれ」聖なる自内証智へはいることも、撰せられる。

さらにまた、五法は、相と名と分別と真如と正智とである。この中、マハーマティよ、相とは、形態・様式・特徴・形相・色相などの姿(lakṣaṇa)として現するもの、これが相である。この相にたいするへこれはかくの如くであり、別様ではない」という、瓶などの名称づけ、これが名である。「これは」船である、鏝であると、かの名を發現し、相を明らかにするところの心心所となげられるもの、これが、マハーマティよ、分別である。これらの法「名と相」が相互に覚知されず、遍計分別されないことによつて、知覚が滅するにいたるとき、名と相とが究極的に不可得であるのが、真如である。真実(tattva)、如実

(bhūta) 決定 (niscaya) 究極 (niśīha) 本性 (prakṛiti) 自性 (svabhāva) 不可得 (anupalabdhī) これが、真如の相であり、わたくしと他のもろもろの如来によって、証得されおわり、如実に説かれ、知らしめられ、開示され、広開された。その真如を証得しおわって、不断不常の正しい了解をもって分別がおこらず、他宗の外道と声聞と独覚の境でない、聖なる自内証智にしたがうところのもの、これが正智である。以上が、マハーマティよ、五法である。これら(五法)に、三性と八識と二無我と一切の仏法とは、包摂せられる。ここに、マハーマティよ、汝は、自らの智慧に善巧であるべきであり、また、余人によっても、そうである。他に誘導されるべきでない。ここに、次のように説く。

(5) 五法と「三」性と八識と二無我とは、すべて大乘に包摂される。

(6) 名と相と分別とは、二「遍計と依他」の自性の相である。正智と真如とは、円成の相である。

(3) へもろもろの如来はガンジス河の砂とひとしい」と
 いう譬喩の意味

そのとき、実に、マハーマティ菩薩摩訶薩は、さらにま

た、世尊に次のようにいった。「世尊によって、読誦の教説の中に、へ過去、未来、現在の諸如来は、ガンジス河の砂とひとしい。」と説かれたとき、世尊よ、言葉のままの意味の理解がなされるべきですか、それとも、なんらかの他の特別の意味があるのですか、どうですか。世尊よ、そのことが語られるべきであります。」と。

世尊はのたもうた。

マハーマティよ、言葉のままの意味の理解がなされるべきでない。マハーマティよ、ガンジス河の砂の量をもっては、三世の一仏の量にもならない。これは、何故かといえ、マハーマティよ、「如来は」、世間を超越したものをさらに超越し、等類のものとは等類でないから、譬喩が

「実は」、譬喩たりえないためである。

P. 230

「だから」、マハーマティよ、もろもろの如来応供正等覚者は、等類のものとは等類でなく、世間を超越したものをさらに超越したものを、譬喩として示さない。ただ、常・無常の執着に執着し、外道の悪見に結びつき、輪廻の世界の輪にしたがっている、もろもろの愚かな人々を厭離せしめ、しかも、かれらが「輪廻の」世界の輪の危難を厭離し、「仏たる」殊勝を望むものとなり、殊勝「なる努力」を始めるときに、へもろもろの如来の生はウドウンバラの華の如し。」と考

えて、努力を起さないことがないように、仏たることが得易いことを示すために、マハーマティよ、わたくしと、かれら如来によって、へもろもろの如来応供正等覚者は、ガンジス河の砂とひとしい。』ということが、譬喩としてのみ語られる。

しかし、また、わたくしは、読誦の教説の中に、所化の人々を見て、興出したまえるもろもろの如来はへウドウンバラの華の如く得難い』とも説いた。しかし、マハーマティよ、ウドウンバラの華は過去に何人によっても見られたことがなく、また、未来にも見られないであろう。しかも、マハーマティよ、如来は世間にすでに現われ、また、現在、現われている。「故に」、それ自身の道理の立場を語るために、興出したまえるもろもろの如来はへウドウンバラの華の如く得難い』というのではない。「譬喩はいちおうのものにすぎない」。マハーマティよ、それ自身の道理の立場の教説が示されても、世間を超越したものをさらに超越したものは、信ずべからざるものであるから、譬喩が適用されない。「それは」、もろもろの愚かな人々ととって、信ずべからざるものである。聖なる自内証智^{p.31}の境界にたいしては、譬喩がおこらない。真実 (Satya) は、心と意と意識とを超越しているからである。もろもろの如来

は真実である、故に、それら如来にたいして譬喩は語られない。

しかし、マハーマティよ、如来は思惟すべからず分別すべからざるものであるから、ひとし、あるいは、ひとしからず、ということがないが、へもろもろの如来はガンジス河の砂とひとしい』ということが、譬喩としてのみ語られる。

たとえば、マハーマティよ、ガンジス河におけるもろもろの砂が、魚・亀・海豚・鱈・水牛・獅子・象などによって攪乱されても、へわれらは、攪乱され、あるいは、攪乱されず』と思惟せず、分別せず、きわめて清浄であり、垢とはなれ、無分別である如く、そのように、実に、マハーマティよ、もろもろの如来応供正等覚者の聖なる自内証智である大ガンジス河の力と神通と自在の砂は、一切の愚かな外道の他論者である魚によって攪乱されても、「攪乱され、攪乱されず、と」思惟せず分別しない。「なぜなら」、如来は宿願の故をもって、また、一切の安楽の三昧を完成するをもつて、それらのものごとを思惟せず分別しないのである。故に、如来は、愛と憎とをはなれているから、ガンジス河の砂とひとしくして差別されない。たとえば、マハーマティよ、ガンジス河におけるもろも

ろの砂は、地の相の自性であるから、地が劫(kalpa)の焼けるときに焼かれても、地の自性をすてない。マハーマテイよ、地は火界paścādyāと結合するものであるから、焼かれない。ただ、愚かな人々は、顛倒におちいった心相續をもつて

「地が」焼かれるものであると分別する。しかし、それ(地)は、火を因として生ずるものであるから焼かれない。そのように、実に、マハーマテイよ、もろもろの如来の法身はガンジス河の砂とひとしく不滅のものである。

たとえば、ガンジス河の砂が無量であるように、そのように、実に、マハーマテイよ、もろもろの如来の光明は無量であつて、もろもろの如来は衆生を成熟し励ますために一切の仏の衆会におもむく。

たとえば、マハーマテイよ、ガンジス河におけるもろもろの砂は、砂と異つた自性をもたず、砂が砂の状態であるように、そのように、実に、マハーマテイよ、もろもろの如来応供正等覚者は、「三」有の生起の因を断じているから、輪廻(samsāra生死)に流転することなく、還滅することもない。

たとえば、マハーマテイよ、ガンジス河におけるもろもろの砂が、減ぜられても知られず、増加されても知られないように、そのように、実に、マハーマテイよ、もろもろ

の如来の智慧は、そのものに体(sarīratva)がないから、有情を成熟せしめることによって、減ぜられることがなく、増加することがない。実に、マハーマテイよ、体のあるものには滅があるが、そのものは無体であつて、体のないものには滅がない。

たとえば、マハーマテイよ、ガンジス河のもろもろの砂は、油の求めによつて絞られても、油などとはなれていないように、そのように、実にマハーマテイよ、もろもろの如来は、衆生の苦によつて絞られても、大慈悲にともなわれているから、一切衆生が涅槃しないかぎり、法界の自在の願の安樂をすてない。

たとえば、マハーマテイよ、ガンジス河のもろもろの砂は、流れにしたがつて流れ、水がないときには流れないように、そのように、実に、マハーマテイよ、もろもろの如来の一切の説法は、涅槃の流れにしたがつて生起する。故に、へもろもろの如来はガンジス河の砂とひとしい。といわれる。

マハーマテイよ、ここなる世間(sau)という意味は、もろもろの如来には存在しない。マハーマテイよ、世間という意味は滅(vināsa)である。また、マハーマテイよ、輪廻(世間)の前際は知られない。知られないときに、い

かにして、わたくしは世間という意味をもって「如来を」示そうか。マハーマティよ、また、世間という意味は、断 (uccheda) であり、「これを」愚かな人たちは知らない。

マハーマティはいった。「もしも、世尊よ、もろもろの衆生の輪廻の前際が知られないとすれば、それらもろもろの衆生の解脱が、どうして知られましょうか。」と。

世尊はのたもうた。

マハーマティよ、自心所現の外界の境を遍知することにより、無始時來の戲論の垢重き分別の習気の因を滅し、自らの分別の所依を転ずるのが、解脱であって、しかも、これは滅ではない。故に、マハーマティよ、「輪廻の前際が知られず」無辺であるという言葉は、「**眞實には**」、無意味である。実に、マハーマティよ、無辺際というのは、分別と同義語である。いま、ここに、智慧をもって觀察するときに、分別とはなれた、内、もしくは、外の何らの他の衆生も存在しない。実に、マハーマティよ、一切法は能知と所知とはなれている。しかし、自心の分別を遍知しないから、分別が生起する。それを了解することによって、

〔分別が〕滅する。ここに、次のように説く。

(7) もろもろの導師をガングス河の砂とひとしい、と見る人々は、実に、もろもろの如来を究極的な不滅のす

がたのものと見る。

(8) ガングス河の砂が一切の過失よりはなれ、流れにしがたがって常住である如く、仏の仏たること (buddha-buddhata) も、かくの如し。

(4) 刹那滅について

そのとき、実に、マハーマティ菩薩摩訶薩は、さらにまた、世尊に、次のようにいった。「世尊は、一切法の刹那滅 (ksana-bhanga) と、それら〔一切法〕の差別 (bheda) の相とを、わたくしに示したもうべし。善逝なる如来応供正等覺者はわたくしに示したもうべし。世尊よ、一切法が刹那性 (ksanika) であるのは、どういうわけですか。」と。

世尊はのたもうた。「されば、実に、マハーマティよ、汝はよく聞き、よく思念せよ。わたくしは汝のために説くであろう。」と。「よきかな、世尊よ」と、マハーマティ菩薩摩訶薩は世尊に聽從した。

世尊はかれに次のようにのたもうた。

マハーマティよ、一切法、一切法とは、すなわち、善と不善、有為と無為、世間と出世間、^{P.235}有過 (savadya) と無過 (anavadya)、有漏と無漏、有執受 (upatta) と無執受

(anupātā)である。要略していえば、マハーマティよ、「一切法とは」、五取蘊であり、心・意・意識の習気を因として生じ、心・意・意識の習気が増上した愚かな人々によって、善・不善として分別される。マハーマティよ、「ただし」、禪定の安樂ともろもろの三昧とは、現法における安樂なる状態(現法樂住)のものであるから、もろもろの聖者の無漏善(kusalaṅsava)といわれる。さて、マハーマティよ、善と不善「の法」は、すなわち、八識である。八とは何かという、すなわち、アーラヤ識となづけられる如来藏と、意と、意識と、外道によっても語られる五識身である。マハーマティよ、この中、五識身は意識にともなわれ、善、不善の利那の交互に継起する差別によって差別され、しかも、差別されない心相統の自体をもち、現に生起しつつ生じ、生起しおわって、滅する。「しかし、五識身は」、自心所現「の外境」を覚知(avaśodha)しないから、滅するや否や、他識が生起し、「外境の」形態と様相の特性を「(覚知し)」能取する意識が五識身と相応して生起する。わたくしは、利那の時間に住しないものを利那性のものであると、語る。

さらに、マハーマティよ、如来藏と名づけられるアーラヤ識は、意にともなわれるとき、転識の習気によって、利

那性のものである。しかし、無漏の習気によっては、非利那性のものである。^{P.238}しかし、利那論に執着する愚かな人々は、一切法のこれらの利那性と非利那性を了解せず、これらを了解しないから、断見によって無為法をも破壊するのであろう。マハーマティよ、五識身は、輪廻する主体(samsarin)でもなく、楽と苦との経験を有するものでもなく、涅槃の因でもない。しかし、マハーマティよ、如来藏は、楽と苦との経験の因を有するものであり、四種の習気に酔わされて、流転し、還滅する。しかし、利那性の見解の分別に熏習された心をもつ愚かな人々は、「これを」了解しない。

マハーマティよ、黄金、ダイヤモンド、ジナの舍利、証得のようなすぐれたものは、不滅(非利那性)のものである。しかし、もしも、マハーマティよ、現觀の証得が利那性のものであるならば、もろもろの聖者には非聖性があるであろう。しかし、もろもろの聖者には、非聖性は、存在しない。マハーマティよ、黄金とダイヤモンドは、ひとしくとりあつかわれ、劫を経て住しても、ひとしく存在し、滅ぜられず、また、増加しない。どうして、もろもろの愚人は、秘密説(sandhya-dharsya)に賢明でなく、内外の一切法の利那性の義を分別するのか。

(5) 六波羅蜜について

さらにまた、マハーマティはいった。「世尊によって六波羅蜜を完全に満足して仏たることが得られる、ということがいわれたとき、それら六波羅蜜とは何であり、また、^{P.287}いかにして「それらを」完全に満足するにいたるのでしようか。」と。

世尊はのたもうた。

マハーマティよ、波羅蜜の種類は、それらは三である。

三とは何かといえは、すなわち、世間と出世間と出世間上上とである。この中、マハーマティよ、世間にぞくする波羅蜜とは、「もろもろの愚人が」、我我所の取著の執着に執着し、二辺に執じ、種々の生存の場所を目的とし、色などの境を望み、布施波羅蜜を完全に満足し、同じく、戒、忍辱、精進、禅定、智慧の波羅蜜を完全に満足するものである。また、梵界に生ずるために、神通を成就する。この中、声聞と独覚は、もろもろの愚人がアートマンの安楽の涅槃を求めるように、涅槃の取著におちいった心をもち、

出世間波羅蜜によって、布施などを修める。また、マハーマティよ、出世間上上の「波羅蜜」は、最高のヨーガのヨーギンである菩薩摩訶薩にとって、唯自心所現を理解し、二(所取・能取)の自心を了解し、分別をおこさず、質料

にたいする取著がなく、自心と色相とに執着しないことによつて、一切衆生の利益と安楽のために、布施「などの」

波羅蜜が生ずるところのものである。およそ、かの所縁にたいして分別の不生起を行する(*shayanī*)の^{P.288}が、戒

(*śīla*)であり、また、それが波羅蜜である。所取と能取とを遍知することによつて、分別をおこさない忍耐(*ksama-*

raja)なるもの、これが忍辱波羅蜜である。精進をもつて前夜より後夜に勤修し、ヨーガにしたがう智見によつて分別が減するから、これが精進波羅蜜である。分別が減することによつて、外道の涅槃の取著におちいらぬのが、これが禅定波羅蜜である。この中、般若波羅蜜とは、自心の分別の無、乃至、智慧の弁別にいたるまで観察し、二辺におちいらぬ、宿業を滅せず^に所依を転じ、自内証の境界をうるために修するとき、これが般若波羅蜜である。マハーマティよ、以上が、諸波羅蜜であり、これが波羅蜜の意義である。

(6) 刹那滅にかんする偈

ここに次のように説く。

(9) もろもろ愚人は、有為を空、無常、刹那性のものとして分別する。河、燈火、種子の喩例によつて、「も

ろもろの愚人により」、刹那の義が分別される。

- (10) しかし、諸法が無活動 (niryatpara) であり、刹那性であり、寂滅であり、作用とはなれ、不生であるのを、刹那性の義であるとわたくしは語る。

- (11) 生ずる無間に (anantarām) 滅するとは、実に、わたくしは愚人に説かない。もろもろの存在にたいする分別が、間断なく、「六」趣に震う。

- (12) それら (分別) の心を生ぜしめる因は、それは無明である。「心の」形態 (rūpa) が生じないかぎり、かの中間の状態は何か。

- (13) 「心の形態が」滅する無間に、心が異って生起する。^{p.239} 「心の」形態が時間に住しないときは、何を所縁として「心が」生起するの。

- (14) いずこより、また、いずこに、「心が」生ずるといへども、心は虚妄を因として生ずる。かれ (心) が成立しないとき、いかにして、刹那滅が認められようか。

- (15) 実に、ヨーギンの三昧と黄金とジナの舍利と光音天の宮殿とは、世間の因によって破壊すべからざるものである。

- (16) 諸仏の証位と証得の法と智円満と比丘たることと、教義の証得とは、実に、いかにして刹那性のものと見

られようか。

- (17) ガダルヴァ城と幻などの諸色は、実に、いかにして、刹那性のものであるか。非大種所造の諸色と大種との或るものは、何にぞくするの。

以上、刹那品第六

変化品

如来の変化について

^{p.240} そのとき、実に、マハーマティ菩薩摩訶薩は、さらにまた、世尊に次のようにいった。

なにゆえに、世尊によって、阿羅漢が無上正等覚をうるに授記され、また般涅槃しない性質をもつ衆生が如来たることをうるに授記されるのですか。また「なにゆえに」、如来が、無上正等覚をさとした夜より、般涅槃した夜にいたるまで、その間に世尊は一字をも説かず宣説したまわらないのですか。また「なにゆえに」、もろもろの如来は、常に三昧に入り、思念せず思考せず、しかも、もろもろの变化を変化して、それによって如来の事業をなすのですか。また、なにゆえに、「世尊は」、諸識の刹那に展転する差別の相を説示するのですか。「また、なにゆえに」、金剛手が常に随従しているのですか。「また、なにゆえに」、

「分別の」前際が知られず、滅(涅槃)が知られるのですか。また、魔と魔業と業の相統と、バラモンの少女チャンチャー(Cāncā)と遊行女スンダリカー(Sundarikā)と空鉢などの業障が見られるとき、世尊よ、「かくの如き」過失がすてられないにもかかわらず、いかにして、世尊によって一切種智が得られたのですか。

世尊はのたもうた。「されば、実に、マハーマティよ、汝はよく聞き、よく思念せよ。わたくしは、汝のために説くであろう。」と。「よきかな、世尊よ。」と、マハーマティ菩薩摩訶薩は聴従した。

世尊はかれに次のようにのたもうた。

「わたくしは」もろもろの修行者に菩薩の行をすすめるために、無余依涅槃界を密意をもって説いた。「すなわち」、マハーマティよ、ここかしこの仏国土において、菩薩の行「をおさむべき」修行者がある。かれらが声聞乘によって涅槃「無上正等覺」を望むとき、かれらに声聞乘の欲求をはなれしめ、大乘をすすめるために、もろもろの变化身によって、もろもろの变化の声聞にそれ(無上正等覺)を「うる」と授記するけれど、法性仏(dharmatā-buddha)によって「授記するのでは」ない。マハーマティよ、かれ(無余依涅槃界)に密意をもたしめて声聞の授記が説かれ

る。マハーマティよ、解脱が一味であるから、声聞と獨覺と仏とにとって、煩惱障の断捨の差別はない。しかし、所知障の断捨は、そこ(声聞と獨覺)にない。マハーマティよ、所知障は法無我の特殊の智見によって清められる。しかし、煩惱障は、人無我の智見の修習をとまなうことによつてすてられる。意識を滅するからである。法障(所知障)の解脱は、さらに、アーラヤ識の習気を滅することによつて清められる。

本住法(pūrva-dharma-śhīta)を密意して、前後にないことがないのであるから、過去に語った同じ文字によつて、如来は思念せず思考せずに法を説く。

「如来は」、明らかな智恵のはたらきをもち、曖昧な記憶をもたず、四種の習気の地をすて、二種の死をはなれ、煩惱と所知との二種の障をすてるから、思念せず、思考しない。

マハーマティよ、意と意識と眼識などの七つは、習気を因とするものであるから利那性のものであり、善無漏の地位をはなれ、輪廻するものではない。しかし、如来蔵は、マハーマティよ、輪廻と涅槃と楽と苦との因になるものがある。ところが、空性に悩乱された心をもつ愚かな人々は、「如来蔵の」清浄を了解しない。

マハーマティよ、変化もて変化されたものもろの如来には、金剛手が脇侍するけれど、根本 (maṇḍa) のもろもろの如来応供正等覺者には、そうでない。なんとすれば、マハーマティよ、根本の如来は、愚人と声聞と獨覺と外道と一切の知識と感覺器官とをはなれており、現法の安樂に住するもの「のみ」が、かれ(根本の如来)を現觀の法智忍によつて了解するからである。故に、かれには金剛手が随わない。

一切の変化の仏は、業より生じたものではない。如来はそれら(業)においてなく、また、如来はそれら(業)より別異でもない。陶匠が所縁などを用いることによつて、一切の作事をなし、相あるものをあらわす如く、「変化の仏も、また、そうである」。しかし、「変化の仏は」、独自の道理として立てられた教説である聖なる自覺の境を示さない。

さらにまた、マハーマティよ、愚かな人々は、六識身の減よりして断見に住し、アーラヤ「識」を了解しないことによつて常見になる。マハーマティよ、自らの分別の本際ほんさいは知られない。かの自らの分別が減するとき、解脱が知られる。四種の習氣を捨てることによつて、一切の過失をすてる。ここに、次のように説く。

(1) 三乗も非乗も諸仏の涅槃もなし。一切は仏たることをうると授記され、また、過失をはなれていると説かれる。

(2) 究極的な「四諦」現觀の智と、同様に、無余依涅槃とは、これは、怯劣のもの誘引のために、密意をもつて示される。

(3) 諸仏によつて智がおこされ、かれら(諸仏)によつて道が示される。かれら(諸仏)はそれ(道)によつてのみ行き、他によつては行かず。故に、かれらには涅槃なし。

(4) 実に、有 (bhava) と愛 (kama) と色 (rupa) と見 (dṛṣṭi) との四種の習氣がある。「これらは」、意識より生じたものと、アーラヤと、意とに住するものである。

(5) 意識と眼「識」などは、無常であるから断ずるものである。無始より常住なるものは、涅槃の智見にぞくする。

以上、変化品第七

梵文訂正

() のなかの数字は南条本の行数を示す。

(12) anupatticca → anupattin ca P. 241 (12) pūrvakam →
pūrvakat (15) prahināir → deçitāir (16) samprajāna →
samprajāna P. 242 (5) prithagjanā avabudhyanate → pri-
thigjanā viçuddhitām avabudhyanate P. 243 (10) bhāva →
bhava

- P. 211 (17) samāpadyante → na samāpadyante P. 212 (1) sva-
bhāvalakṣaṇa → svalakṣaṇa (10) svacittameva | dvividhā →
svacittameva dvividhā (11) svajñānān → svacittāññānā
(16) sarva → satva P. 213 (5) grāha → 不要 (9) akuṣalās →
akuṣalāt (15) buddhadharmālayā ca || → mayā ca buddhāih ||
P. 214 (8) abhiniveçam vikalpayati | tena punar → abhivive-
çavikalparahitā na punar P. 215 (9) cittaṃtre nirābhāse
vihārā buddhabhūmi → cittaṃtātro nirābhāso vihārā buddha-
bhūmis (15) niçcerus → ? P. 221 (3) samavāyāv → 不要
(10) kuṣalānān → akuṣalānān P. 222 (14) duṣprativedhāçca
| malāmate → duṣprativedhāçca mahāmate P. 225 (16) pra-
dhāna → pradhānā P. 226 (5) pravartate → 不要 (11)
viññāna → jāna (16) samavasriṭāh → sanṃprashriṭāh P. 227
(4) jalacandravat | aṣṭhā → jalacandravad aṣṭhā (14)
svabhāvo vikalpā → svavikalpā P. 228 (9) sama → ? [Tib.
gdos pa] (9) dharmeti → varmeti (17) pakṣapara-pakṣa →
parapakṣa P. 231 (2) dviṣṭalakṣaṇa → 不要 P. 233 (2) mahā-
mate → 不要 (3) tathāgatāih → 不要 P. 235 (15) kṣaṇi-
kam → 不要 P. 236 (9) samadhāraṇaṃ kalpasthitāh → 不要
P. 238 (6) pūrvakarṇa → pūrvakarṇā (11) kṣaya → kriya